

能海 寛のたどった道

金子民雄

歴史家、中央アジア研究家

今からざっと100年前、中国西南の省・雲南で、一人の日本人僧が行方不明になりました。東本願寺系の能海寛(のうみ ゆたか)という人物です。彼は正しい仏典を日本に将来することを念じ、チベットに向かいました。最終目的地はラサです。しかし、当時のチベットは外国人の一切の入国を認めませんでした。そこで彼は変装し、数度の試みをしますが、遂に金沙江上流(揚子江; 長江の上流)で消息を絶ちます。彼の身に何が起きたのか、殺害されたのか、それとも事故と見せかけて現地の僧院に身を隠したのか、未だ明確ではありません。彼の調査がいつか曖昧になり、事実すら歪曲されていくようになります。彼の人間の性格のためだったのか、軍関係の隠蔽工作だったのか、当時の雲南をめぐる清・英・仏の社会事情に起因があったのか、これらの点も考慮に入れて、改めて一度この事件を追ってみたいと思います。<以下は、第6回雲南懇話会(2007年6月30日開催)でお話いただいた内容の要旨である。>

私も、雲南や能海寛が辿ったところは通って、何百枚かスライドをとってきたのですが、それをここで流すときりがないと、他の方々がすばらしいスライドをたくさん見せてくださっているので、今日はお話だけでいくことに致しました。能海寛、この人のことはもう伝記でたくさん出ていますので、あまり活字にならない、そして、私個人の極めて主観的なことを申しますので、漫談だと思って聞いておいてください。



能海寛 僧
日三十二年三月二十三日
重慶府重慶

写真1 能海 寛 [明治32年3月、重慶を出発する際の
写真]

1980年代の終わりから90年にかけて雲南が一般にオープンした時、あの辺を歩いたことがあります。その頃はまだ北京政府はその重要性が判ってなくて、「将来メコン川が重要になる」ということを言っていましたら、やっぱり何年かたって、メコンが重要視されるようになったみたいです。あそこのメコン川をずっと下って、ラオスとの国境まで船で行きたいと言いましたが、当時はなかなか許可が得られませんでした。国境から1キロくらいまで、やっと行かせてもらいました。

小林尚礼さんのお話のところで、お茶の話がされておりました。このお茶のことは、能海も報告をしております。ちょうど一番最後の、木の枝が入った硬いお茶(磚茶)ですが、何百人というグループがこのお茶を運んでいたということも記録に出てきます。能海の場合、雲南のところでは、お茶とケシの話も出てきます。雲南は、日本にとって非常に関わりが深い地域でもあります。ちょうど20年近く前に行った時に、樹齢600年と800年のお茶の樹を見てきました。ここに大きなお茶の工場があるんです。日本は非常にきれいにお茶木を剪定しているのですが、まあ、そこまでのかないで、かなり野放図に山の斜面にお茶の木を植えています。工場を訪問した時、所長さんは留守だったのですが、まもなく帰って来られた。日本の静岡から帰ってきたばかりだと言うのです。雲

南の茶の葉を静岡に出していると言っていました。

雲南で、我々日本人に重要だと思うのは、お茶ともうひとつ、梅があります。春になって雲南に行きますと、じつに梅の花がたくさん咲いています。でも中国の人達は、梅の実を全然利用しなかった。マルコ・ポーロの旅行記をみればすぐに分かりますが、雲南では、黄金と塩というのは等価だったのです。同じ重さであるほど、塩は貴重だと。ですから、梅干なんて作れなかったのです。それが、日本に入って、お茶と梅干が非常に威力を発揮しました。我々にとって、雲南とは本当に毎日忘れてならないところなのですが、どちらかという、雲南は今でも、はるか雲の先の土地というような感じがします。

あと一つ、雲南の方をやられるなら、是非、歴史的背景を知る意味でマルコ・ポーロを読まれるとよろしいかと思えます。我々がマルコ・ポーロの旅行記を読む時に、日本語の翻訳版は上下二巻くらいになるのですが、だいたい上巻の方は読んでも下巻は読まないのです。重要なのはむしろ下巻の方です。マルコ・ポーロはもともと商人です。商人というのは、まず、美しいもの、お金になるところに目をつけます。「マルコ・ポーロは実際には中国に行かなくて、適当に聞き書きで旅行記をつくったのではないか。」という本が出ています。その理由の中に、お茶のことが出てこない。万里の長城が出てこない、女性の足を小さくする纏足の話が出てこないから、マルコ・ポーロは中国に行っていないのだらうと、こう言うのですが、マルコ・ポーロの立場からすると、いまこの3つを説明しても理解されないだらう。それで、理解されないものはしゃべらない。もし、お茶が彼にとって利益になるならば、きっとお茶の栽培をしたと思うのですが、当時のヨーロッパは木を食料にしなかったのです。ですから、木の葉っぱなんでものは絶対に食用と信じられないから、書かなかった。あとの万里の長城もそうですし、女性の足を小さくするなど、とても信じられないから、言わなかっただけだと思います。

能海さんはお坊さんで、そして何の目的でチベットに入ろうとしたかという、これは当時、河口慧海も寺本婉雅もそうですが、日本のお経、あれは漢文で書かれていますから、そのサンスク

リット語の原本を見たいと思った。ところがサンスクリットはほとんど消滅していますから、一番正確に訳されているのがチベットの仏典だと考えた訳です。それを日本に持ってきたいというのが、この人たちの最大の目的だったのです。

これは、私も別のところから聞いてちょっとショックを受けたのですが、インドの方の仏教を勉強しているインド人学者が、「日本の仏教というものは、本当の仏教とはちょっと違うよ」と言ったのです。まあ、お経が違うんだからしょうがない。日本に入ってきた仏教は、全て中国経由で入ってきているから、漢文で書かれた仏教の経典からいくら学んでも真髄には到達しないのではない、これはインドの方の研究者が言いました。私にもそれはまあ少しわかるのです。ですから、能



写真2 河口慧海

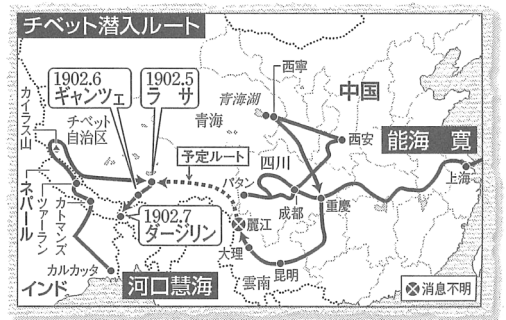


図1 河口と能海のチベット潜入ルート

海たちがチベットに行こうという気持ちがわかりました。

そして今度は仏像なのですが、我々は日本にあるたくさんの仏像を、みんなそれぞれ素晴らしい作品だなと思うのです。ところが、インド系の学者が言ってくれたのは、なんとあれは、木の人形なんだと言うのです。言い方を変えればくけし>みたいなもので、仏教とは違う、とこう言ったんです。聞き間違えたかと思ったので何度か聞いたのですが、まあそのあとはよく分かりませんでした。言っている意味は大体わかりました。このところに能海や河口慧海の真髓があると思うのです。日本人はあの大陸に行って、中国から仏教を伝えました。ただそこから先に行かなかった。まあ、三蔵法師や義浄三蔵等が陸のシルクロードや海のシルクロードを辿ってインドに行ったわけですが、日本人は行きませんでした、行けなかったと思います。で、「中国から仏教を持ってきたのだから、どうしてもインドの方の本当の意味の仏教とはちょっと違うんだ。」と言うんですね。これは我々にはよく判らないですね。それですから、能海の世界をもう一度、メモや何かで見直せば、そういうような雰囲気はかなり出てきます。彼はチベットや、雲南に来て、やはり自分達がやっていた仏教とはちょっと違うな、ということに触れています。やはり見方を変えなくてははいけないなど。そこで思いました。こういうことをいうと罰があたるぞと言われそうですが、日本の仏像は本当の仏像ではない、お人形さんなんだという考えもある、ということもちょっと覚えておいて下さい。

私は今、編集の責任者として能海的全集を作っております。この全集は、原本を写真版にして本に仕立てたものです。これは出した時に勿論批判を受けました。私が一応責任をとることになっていますが、こういうことです。能海の日記というのは、奇跡的というか、鳥根県のお寺の壁の中、押し入れの中にくぎづけで入っていたんです。幸いに火事にも遭わなかったし、震災にも遭わなかったために、まあほぼ完全に、メモまで残っていたわけです。今、鳥根県で、能海の研究會がそれを大切に保存するようになりました。これは、非常にいいことだと思うのですが、ただ非常に難しいことがひとつ出てきます。あまり世間で知られな

かった時には資料はうまく残るんですが、ひとたび世間に知られてくると、今度は非常に危険になるのです。どういう危険かという、人々の関心が高くなると、盗難にあたり、火事(放火)で燃えたり、無くなったり、いろんな形で消滅する可能性が強くなります。是非これからも覚えておいて頂きたいと思います。貴重なものは世に知られたら、もう、我々のものじゃない、一般のものになってしまいます。ですから、今度はいろんな方が、是非これを見せてほしい、それで、たくさんの方がきて見られると、いつかだんだん破けていったり、字が見えなくなります。そのために、破損してしまう恐れがあるのです。だからといって破損するのを恐れて隠してしまったら、資料として使えません。どうしても皆さんに見てもらいたいとなると、ある人にそれを託して、研究させればいように思うのですが、案外人間の人生は短いものです。一人の人間が一生の間のできる仕事なんて、知れたものです。

能海の研究會が出来て10年くらいたち、その間、私は一度も現地に行かないで様子を見ていました。まあこれは悪口ではないのですが、あまり進展しそうでないと。研究は一生懸命続いているけれども、研究成果がまとまってこない。10年目に呼ばれたので、いまから数年前に出かけました。そして、もうこれを写真版にとって全集にしてしまったらどうか、その後で研究してもいいのではないかということを行いました、承諾してくれてスタートしたのです。この6月に第4巻が出て、7月に第5巻が出ます。そうしますと、能海の日記が全部出ることになります。特に3、4、5巻をよく読まれれば、彼の旅をした様子がよく分かります。

能海をこれから研究される方は、この本を是非ご覧になってください。その各巻の後ろに毎回解説を書いたのですが、これは言うほど簡単ではないのです。書いてある字が、もう読めないような字がいっぱいあります。ただ、一つです、こういうことはご存知でしょうか？あまり公表してはいけないと思うのですが、活字になっている全集ものがあります。例えば、夏目漱石の作品でも言えると思うのですが、漱石の生原稿がそっくり活字になっていると思ったら大間違いです。それから、宮沢賢治のもそうだったのです。生原稿の

まま読めれば最高なのですが、出版する時に必ず都合の悪い部分が出てくるものです。そうすると、その部分を消していきます。ですから、書いた人の本心がなかなか分らなくなるのです。いろんなものをこれから調べる上で、活字になったものだけで研究していくと、必ず、あるところで壁にぶつかってきます。それを何とか打破するのは、生の資料を見つけることなのです。生の資料はどうかといいますと、一つは遺族の持っている資料のこともありますし、外務省のところに保存されているものもありますし、旧軍のところに保存されていたものもあります。あと一つは、個人的な手紙があります。この、手紙というのは、大した物じゃないのでは…と思う方もいるかもしれませんが、一通の手紙が出てきて、既存の事実が狂ってしまうことがよくあるのです。これもあとでお話しますが、今、雲南の方の日本の研究が、非常に注目されています。ヨーロッパやアメリカ、中国も含めて、今非常に注目しています。どうしてかという、この雲南、四川、東チベット方面は、ヨーロッパ勢の地理学者達が入らなかったんですね。一つは中々入れなかったのと、もっと中央アジアの方に関心があったので、こちらがどうしても手薄になったのです。ですから今、ヨーロッパやアメリカが非常に関心を持っています。それで、関心を持って、いろいろ誘いがあって発表する日本人は、人が良いものですから全部公表してしましますが、こちらの情報を全部教えちゃったら用なしで、相手はやがてそっぽを向きます。全部出さないで3分の1くらいは、しまっておかれるのも良いのではないかと思います。

と言いますのは、こういうことがあります。今から100年位前の、丁度能海が行方不明になった時、1902年頃の数年間、西本願寺の大谷光瑞たちが西域の探検をしました。そして、大谷光瑞は重慶の方まで旅をしたという業績で、英国地理学会の会員になっています。会員には中々なれないのです。業績と、推薦人が二人ぐらいないと会員になれないのです。そのあと橘瑞超さんも会員になりました。ところが会員になったのに、西本願寺の西域探検の報告が出ません。ジオグラフィカル・ジャーナルという雑誌があるのですが、あれに一件も載らないのです。短い記事は出るのでありますが論文がでない、何故出さないのだろう…？

大谷光瑞の何かを読んでいたら、「我々は英語で論文を書く」と書いてありました。ですから、当然出るべきだと思うのですが、全然出てこない。一つは、忙しくて書けなかったのか、書けないことはないのでは何かの具合で止めてしまったのだろう…ぐらいに思っていました。が、スタイン宛ての手紙が出てきたのです。これはまだ公開されていませんが、英国地理学会の書記が（彼が、全部の出版の権限を持っているのですが）、スタインに宛てた手紙だったのです。その手紙には「大谷光瑞達が論文を我が雑誌に載せようとしているけれど、あんな奴の論文は絶対に載せない。」と書かれていました。個人の手紙ですから、そういうことが書けるのです。スタインがなんと返事をしたのかは公表されていないので分かりません。たまたま見たのがそれだったのです。大谷光瑞の論文は、ジオグラフィカル・ジャーナルには1編も出ませんでした。

もう一つの例を上げましょう。1920年代に、タリム川の中流が枝分かれして、ロプ・ノールの方に、昔の湖沼の方に流れて行って、ロプ・ノールが甦ります。それで「さまよえる湖」ということになったのですが、その時にヘディン門下のノーリンという地質学者が、水の戻ったロプ・ノールのところに行って詳細に調べてきました。是非世界中に知らせたいという思いで、英語の論文を書き、ジオグラフィカル・ジャーナル誌に掲載しようとした。その時にも、簡単には掲載されないだろうと読んで、これは元インド測量局長官だったサー・シドニー・バラードという人が一生懸命に論文を推薦してくれたのですが、とうとう



写真3 大谷光瑞とゴビ砂漠での探検隊

ジオグラフィカル・ジャーナルには載らなかったのです。なぜかという、もう競争が起こっているのですね。英国以外の連中に、重要な業績を与えたくない。そういうことが根にあったみたい。それで、それと能海がどう関係するのか…となるのですが、能海は純粋なお坊さんとしてチベットに向かいます。ですから、自分は別になんでもないと思うのでしょけれども、能海というお坊さんが雲南の方に入っていくということを、英国やフランスは、非常に重要視していたのです。我々があと一つ見落としてしまうのが、現地にたくさんいる宣教師です。この宣教師達はキリスト教をしっかりと布教するためにいるんだと、雲南にもたくさんいました。で、この人達がですね、まず8割方は情報を担当していた人達でしょう。ですから、能海が行方不明になった時に、彼らは、能海のことを知らなかったのかと思ったら、多分間違いだろう、大半は知っていたのではないかと思います。当然、宣教師は必ず自国の外務省に知らせていて、そこが握りつぶしたんだらうと思います。どうしてそんなことをするのかといいますと、当時の中央アジアでは、グレートゲームというのをロシアや英国がやっていました。カラコラムからヒンズークシュを含む地域です。ところが雲南方面は、フランスがインドシナ半島のベトナムを植民地に持っていて、ここから雲南のほうに食指を伸ばしてきたのです。ですから、清朝政府も、雲南には外国人を入れさせないこととし、フランス側は鉄道の権利をどうしても取ろうとしたのです。英国側はビルマの方から入って来ようとした。英国のインド測量局のライダーという、ツアンポー川上流をずっと測量した有名な人、後にインド測量局の長官となる人ですが、このライダーも含めて雲南の地図を作ったのです。それで、ビルマから雲南に鉄道を引こうとしていた訳です。ところがどうも山が多くてうまくいかなかった。これはやはり、マルコ・ポーロを読まればよくわかるのですが、溪谷が多くて通れないのです。

日本は、お坊さんが熱心に布教活動をしていく。ところがフランスやイギリスは仏教の坊さんではありませんので、日本人の発想があまりよく分らないのですね。あのお坊さん達は必ず日本の外務省や軍部のスパイだらうと、そう踏んでいた訳で

す。これは説明のしようがないのです。この人達がそう信じてしまっている、ではどうするかといいましたら、皆さんどうしますかね？ これは全く身を隠して、変装して、旅をするしかないと思うのです。ところが、能海の旅行記を読みますと、全然自分の身を隠そうとしていないのです。私は日本人、日本の僧侶だと言っています。重慶にあった日本の外務省の出先機関も、身の安全に対する関心を全然持っていない。これはもう大失敗なのです。能海の企てが成功する確率なんて初めからゼロに近い。ところが、当時の日本の人達が全く注意をしていないのです。これが不思議でしょうがない。

そして能海は、一人でやっているのではなくて、南條文雄という高名なサンスクリットの学者さんがバックにいる、それに東本願寺…。ところが、能海 작품을丁寧に読んでいくうちに、これは私自身の感想ですが、嫌気が差してきたのです。能海には全然注意力が無いのです。これでは全く、危険なところにただブラブラ行ってしまうことになるんですね。能海は若いのだから、何故、能海の周囲にいる人が注意できなかったのか。ここのところが私にはどうしても分らないのです。それじゃあ、当時の人はそういう情報を知らなかったのだからということになるのですが、知らないで遠いところに行くのはどうなのでしょう。私はだんだん、能海の日記を読んでいるうちに彼は本当に気の毒だと思うけれども、何故周りの人が注意をしなかったのか。第一ですね、これを言ってしまうと最後の結論になってしまいますが、能海という人はお坊さんで、目的はラサに行つて、ラサにあるどこかの大学に入学して、そこで仏教学を学んで、経典を日本に持ってこようというのが多分最大の目標だったと思います。ただ、それはどこにも書いてないのですが、そうでなかったらただの冒険家になっちゃいます。ラサに入つてことは言っているのですが、あまり最終目的は書いていないのです。多分、仏教の研究をしようと思つてお寺さんに行つて、河口慧海がちょうどラサのセラ大学に入ったと同じようなことを、考えていたと思うのです。

ところで、チベットのお坊さんは結婚していませんでしょうか。能海には奥さんがいるのです。これは向こうで受け入れられるのでしょうか。まず、

わかったらもう八つ裂きでしょうね。殺されないまでも、まともに扱われなと思います。そのところがまず第一に考え方が甘いのです。結婚してはいけないというのではなくて、チベットに入るのだったら、一応結婚を後にして独身で行かないとまずだめです。チベット仏教は、奥さんをもたらたらお坊さんではないのです。何故それが分らないのか。

南條文雄という人は英国に留学して、サンスクリットを学びます。当時、世界一流の学者なのですが、チベットやなにかの探検はしていません。ですから、苦勞がわからないのです。その苦勞がわからない人が、チベットへの探検を、その辺の京都か奈良に行くような考えで、送り出したとしたら、これはもう絶対に責任があるのです。能海

が行方不明になった最大の責任は多分、南條文雄にあったと、私は思います。

能海についての旅行記を読まれると、伝記作家の人がそこまで書いているかどうか分かりません。活字にしますと作家は批判を受けるから、今、私が言ったような勝手なことは言えません。ですから遠慮するのですが、能海がやっと三峡の難関をこえて重慶に入ったところで、日本の外務省の出先機関から、日本人が二人来るから協力して行けという情報が入るのです。その一人が寺本婉雅であり、もう一人が成田安輝という人です。成田は、外務省から派遣された人で、寺本は能海と同じ東本願寺のお坊さん。外務省の出先の機関としては、一人で行くよりも三人で協力していった方が良さだろうと、こう踏んでくれた訳です。決して意地悪をした訳ではないと思うのです。日本人特有の好意なのですが、実はこれは好意とはいえないのですね。例えば外国の旅行家達、一流と称する外国の人達、ここで外国人というのは欧米人ですが、大概一人で探検しています。一人というのではなくて従者が付きますけれども、仲間では旅はしません。どうしてかという、どんなに親しい仲間でも、3、4ヶ月以上旅行すると必ず仲間割れするのです。ぎくしゃくするのです。ですから、有名な人たちは皆ほとんど一人です。ロシアの探検隊は大勢でやります。それは軍隊ですから、隊長がいて階級制でビシッとしています。わがままが言えず探検ができるので、これは例外です。もう一つ大勢でやった例としてドイツ・トルファン探検隊というのがありますが、全員が精神病患者のようになってしまうのです。あの中で隊長のグリウンウェーデルという方がいたのですが、あの方は完全に最後には気がふれまして、脳病院で亡くなるのです。その時、行った隊員達が、隊長が何を思って死んだのかわからないから、隊長が最後にノートかなにかに書いてあった、ミミズがのたうったような字を墓石に刻んだのです。日本だったら戒名でもあげるのでしょうけれど。この隊は全員がノイローゼになる。それは学者達だけで行ったものですから、どうしても成果のとりこになって、病気になってしまったのです。嫉妬もあったでしょう。

能海が第1回目にチベットの国境のところに行く時に、こうして3人で旅することになったので



能海の妻、静子

写真4 能海寛（再掲）と妻・静子



20歳頃の能海寛



能海の師、南條文雄(晩年)

写真5 20歳頃の能海寛と晩年の南條文雄

すが、その中の成田という人が、何かよく得体がわからない。ところがですね、日本では当時紹介されていませんが、現地の人達は全部知っていたらと思う。現地の人というのは、フランスや英国の宣教師達です。外務省派遣の人と、全然政治性のないお坊さんが一緒に旅をするというのは、全く駄目なのですね。どんなに私は政治的に何もないと説明したって、人は信じません。ですから、ここのところはもう一度、能海の部分は、洗い直さないとわからなくなるかもしれません。

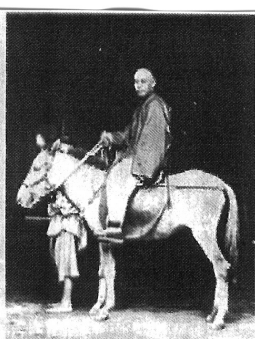
能海は、お経についてこういう結論を出しています。「日本だけ、漢字の、自分の言葉でないお経を使っている」と。「チベットに行くと、人はチベット文のお経を読んでいる、中国の人は中国文のお経を読んでいる」と。ところが、日本人だけは漢字をそのまま読みくだしたものだから、自分は日本に帰ったならば、日本文のお経をつくりたいと言っていたのですが、惜しいことに亡くなってしまった。あとの河口慧海や寺本婉雅が果たして、そういう試みをしていたかどうかは、判らないのですが。

河口慧海、寺本婉雅と能海、まあ能海は途中で失踪してしまったから、どちらかという日本人でチベットに入ったお坊さん同士の闘争という二人になるのですが、二人は非常に仲が悪い。寺本婉雅は何も言わないのですが、河口慧海は罵倒に継ぎ罵倒をしています。何故そんなに寺本を批判するのかという、これはよく判らなかった

のですが、外交文書のほうから調べないと判らないのですが、それで、英国の方は私は大体調べたのですが、一つ見られなかったのはロシアなのです。ところが、ソビエトが崩壊したために、ロシアの外交文書が読めるようになりました。それで取り寄せて見ました。何を見たかと言いますと、河口慧海の一番重要な報告というのは、ほぼ能海も同時期に旅をした重なる時期なのですが、河口慧海はラサに入ると、「ラサにロシアの銃器が運ばれていた」ということがまず書いてあります。それから、「ラサに鉄砲の工場があった」ということ、あと一つ、「ドルジェフというブリヤート・モンゴル族のお坊さんが、ダライ・ラマ13世に取り入ってロシア最頂にさせている」ということが書いてあります。これは河口慧海の旅行記に書いてあります。それをチャンドラ・ダスから聞いて、イギリス側はラサに武力侵入する訳です。いざ占領してみると、河口慧海が喋ったこの3つのうち、武器工場もなかったし、武器が運び込まれたことも無かったのです。河口慧海が嘘をついたのかというと、嘘ではなく、チベット人から聞いて書いたのです。あと一つ、ドルジェフというこのお坊さんは、実際にいたわけです。このドルジェフという人は、ロシアの確かにスパイなのですが、初めは中央アジアの方から入ってきたのです。ところが、2、3度目はインドを横断して入ってきたのです。今のシッキムを通して入ってきた。これが判ったから、インド総督カーゾン卿が、チャンドラ・ダスは能無しだといって怒り狂ったわけです。彼が何故叱られたかという、彼はイギリス政府から年金のようなお金を貰ってましたから、決して民間人ではありませんので、イギリス側が怒ってもしょうがないのです。チャンドラ・ダスはギブアップしてしまったために、河口慧海の情報を頼りにしたのだと思います。そうすると、河口慧海もそれを知っていて、自分の師匠さんだから教えてあげた。まあそのくらいはいいと思うのですが、これをドルジェフが、青海省のタール寺のほうに行き、そここのところに寺本もいまして、逆にロシア側の情報を彼はよく知ったわけです。そして、寺本はきっと河口慧海が英国側の秘密エージェントになっているという情報をほぼ知ったのでしょう。河口慧海はそれで頭にきたらしいのです。「自分はエージェントではないのだが、



寺本 婉雅、1905年、シムラ(印度)にて
『能海寛 チベットに消えた旅人』より



成田 安輝、1900年、成都にて
『西康漂泊 チベットに魅せられた10人』より

写真6 寺本婉雅と成田安輝 [1905年、シムラ(印度)での寺本と1900年、成都での成田]

結局情報を教えてしまった」と。寺本さんが立派だったと思うのは、それについて何も言わなかったところです。私はもう少しドルジェフの資料を知りたいと思いました。これらは唯一、河口慧海がもたらした情報なのです。ソビエトが崩壊してロシアの外交文書が公開されたので、それを見たら、こういうことがあります。1908年というと能海が死んで数年たっていますが、そのときチベットの探検を終えたヘディンが、丁度1909年の1月になるのですが日本訪問した後、シベリア鉄道を通してサンクト・ペテルブルグに行き、ニコライ2世に会うのです。多分ヘディンはカーゾン卿ではなくて、次のミントー卿からだろうと思うのですが、このドルジェフの話の聞いたのでしょね、ニコライ2世にドルジェフについて質問をしたのです。そしたら、「それは全く関係がない人間だ」と言ったというのです。では嘘をついたのかなと思えば、これは、政治家なんかと違って国王とか貴族階級というのは嘘はつきません。嘘をつかなくてはならない時はしゃべらないのです。それで私は、ヘディンの記録から、ドルジェフという人間の役割はたいして大きくなかったのではないかと考えていて、ソビエトが崩壊した後、ロシアの秘密文書を見ましたら、やはり、大した扱いではなかったのです。ドルジェフなんてお坊さんを、ロシア側は重視していなかったのです。ただ、英国側は、河口慧海からのオーバーな表現を聞いて、それで、武力でラサを占領してしまったのです。ですから、河口慧海だけは英国地理学会から非常に褒められるのです。ただし、他の日本人はもうボロクソに言って、論文も載せてくれない、背景はそういうことになります。

能海という人は非常によく物を書く人で、南條文雄宛にたくさんの手紙を書きました。これは幸い活字になって本になっています。ですから、それをお読みになると判るのですが、一番重要な手紙2通がその中に入っていないのです。一番それが能海の謎を解く手紙なのに、欠けているのです。初めは隠したのかなと思っていたのですが、そうではないらしい。どうも、これは私が以前、「古書通信」という雑誌に書いたのですが、南條文雄という人は英国大使館と非常に近い場所に住んでいたのです。英国側と非常に関係も深かった。そして、ちょうど能海から手紙が届いた3日後に

上海の英字新聞に能海と寺本達がチベットに入るのに失敗したというニュースが載るのです。知るはずのない遠い場所で…。それは南條文雄が能海からの手紙を受け取って、多分英国側に教えたのでしょうか。それで、英国側はすぐに上海の英字新聞に教えたのでしょうか。今なら「手紙かな？」と思うかもしれませんが、当時、数時間もあれば電信でニュースが届きました。ですから、それが向こうの英字新聞に載ってしまったら、もうグレートゲームはこれで終了です。日本側の動きはもうすっかり判ってしまったのです。東側からチベットを狙っても絶対駄目だということなのです。当時、日本と英国は日英同盟を結んでいましたから、フランス側はかなりキリキリしていたと思います。最後に能海が死んだ場所は、どうも、フランスの商人がそれを知っていたというニュースが出てくるのですが、或いは消されてしまったのかもしれませんが、もっと詳しく知っていても、教えなかったのかもしれませんが。日本側は全てが不注意で、不注意に次ぐ不注意で失敗したと思います。

これから、いろんな国に旅をする時に、こういう人達はただ気の毒に亡くなってしまったというのではなく、背景も知っていた方がよろしいのではないかと思います。

最後の結論は全然ないのですが、今から30年程前、ある出版社の社長になった人から、私が何か言ったら、「お前、そんなことを言っていると今に誰も相手にしなくなるぞ。」と、言われたことがあります。それで、随分嫌な思いをしました。これが大体、いろんなところの殺し文句なのです。相手の抹殺です。

そう言うのと、言われた方は真実を喋らなくなるのです。ですけども、私も平気で言いました。何を言われても一向に構いませんが、いい情報というのは是非知った方がよろしいかと思います。人から何とと言われても構いませんが、今日はあんまり喋ってはいけないことまで話してしまったみたいで、まとまりのつかない話になり本当に申し訳なく思っています。今日はどうもありがとうございます。

【付記】

- 1) この要旨の作成、写真・図の挿入等の編集は、雲南懇話会の前田栄三、長岡正利が行いまし

た。

- 2) 文中、「中国西南の省・雲南」とあるのは、100年ほど前の中国の版図に依拠している。
- 3) 写真1『能海寛遺稿』（能海寛追憶会）
- 4) 写真2『西藏旅行記』明治37年、東京博文館
- 5) 写真3『別冊太陽 No.125『日本の探検家たち 未知を目指した人々の探検史』2003、平凡社
- 6) 写真4 能海の妻・静子『能海寛 チベットに消えた旅人』江本嘉伸、1999、求龍堂
- 7) 写真5『能海寛 チベットに消えた旅人』江本嘉伸、1999、求龍堂
- 8) 写真6（左）寺本『能海寛 チベットに消えた旅人』1999、求龍堂。（右）成田『西藏漂白 チベットに魅せられた10人』江本嘉伸、1999、求龍堂
- 9) 図1 チベット潜入ルート；『日本人の足跡1』産経新聞「日本人の足跡」取材班、2001、産経新聞

当日配付された参考資料

能海 寛 一慶應義塾時代を中心に—

金子民雄

数奇の人

いまからざっと百年ほど昔の1901年、一人の日本人僧侶が中国西南の省、雲南から揚子江（長江）上流の金沙江に沿って北上したまま、消息を断ってしまった。この人物は東本願寺派の能海寛といった。彼がチベットを目ざしたのは、別に探検や地理学的調査を目的にしたのではなく、あくまで正しい仏典を将来することだった。

インドでは十世紀を境に仏教は衰微し、仏教の原点であるサンスクリット語のテキストも失われていった。しかし、この最良の原典訳が「カンジュル」、「タンジュル」（西藏大蔵經）であると分るにつれ、明治に入るとにわかにこの經典を求めようという声次第が大きくなった。なにしろ日本では全てが漢訳の仏典を元にしてきたからである。

ただ、チベットに入ることは、考えるほど簡単ではない。ではなぜそんな気を起したのか、それにチベットへ潜入しようとする前に、なぜ東京に

出て来て慶應義塾に籍を置いたのか、そこで彼は何を学んだのか、これを乏しい資料から見ていてみたい。

能海寛は、明治元（1868）年、島根県の山里にある真宗大谷派の浄蓮寺で生まれた。しかし、七歳のとき父を亡くし、大変苦勞することになった。明治19年3月に京都に出て、西本願寺の普通教校に入ったものの実家から十分な学資が続かず、一層苦しんだ。ただ明治22年9月に壇家の好意で学資金270円を4年分として出してもらい、一応勉学の見通しが立った。

普通ならこれで一安心で、以後、故郷に帰って住職を継げばよかった。ところがたまたま前年の明治21年、学友の東温讓が仏典を求めてチベット入りを目的にインドに出かけるのを見送ることがあり、このときから能海にも鬱勃たるチベット行の気持が、押えられなくなっただけではない。しかし、現状の学力ではとても国外に出られる実力がな

い。幸い、いま彼の手には奨学金があった。夢の実現はすぐ目の前にあるではないか。あとは自分の決意一つにかかっている。お金を手にした4ヵ月後の明治22年12月、彼は突如、東京に出る決意を固めた。この発想は12月12日の午前11時頃、教室で授業を受けているとき、突然頭にひらめいたという。いささか神懸り的で話としては面白いが、これを実行しようとなると、もう常軌を逸しているとしか思えなくなってくる。

彼は「春秋日記」の中で、こう書いている。なんと例の靈感を受けた翌13日には、もう「朝星ヲ頂テ京都七條停車場ニ行キ、5時35分発ノ一番列車ニ乗込ミ東都ヲ指シテ出」発したというのだ。これでは着のみ着のままの状態だったにちがいない、まあ無謀といえそれまでだが、東海道線がこの年に開通したばかりだったのである。

慶應義塾入学

能海はその短い生涯の中で、まさに書き魔と言ってよいくらいの日記、メモなど調査記録を書き遺した。明治23年の丸1年間、慶應義塾での学生生活を送った年であったが、惜しいことに彼の日記である「春秋日記」は、わずか1、2月の2ヵ月分しか遺っていない。他は現在見つからない。ただこの間をわずかに補うものに「英文日記」

がある。能海が慶應義塾に入ったのも、英語の力をつけたかったからで、1月29日の項にこうある。「英文ヲ以テ主義トスベシ…… Wisdom and Mercy. No. 1st ヲ作り、英文ヲ作り、主義ヲ述ベントス」と記して、「英文日記」の第一号を書き始めた。これは慶應に進んだ一番大きな成果だったのであろう。

東京に出て来た能海はいよいよ慶應の入学を決意したようで、1月13日に双書（願書）と履歴書を提出した。入学するには試験があったようで、具体的にどんな風に行われたのか不明だが、学務課からは試験日は追って通知すると言われたようである。一人で受けるのか、幾人が集ったところですか記載がない。3日たった1月16日になってようやく、18日に試験を行うので出校するようにとの通知がとどいた。この日は午前7時55分から試験を受けたが、どんな試験だったか分からない。どうも結果がよくなかったようで、重い気持ちで宿に戻ったらしい。しかし、試験はパスし、予科三番一に入学許可は出たものの、これは希望していたものでなかったようで、午後1時また学校に出かけ、再受験を願い出たものの、これは聞き入れてもらえなかったようだ。彼はようやく目的の学校に入学できたものの、前途を考えると暗かったらしい。学費がとても続きそうでないのだ。学費が安く、学期も短い井上円了の創設した哲学館（現・東洋大学）に行こうかどうか、悶々として夜もよく眠れなかったらしい。しかし、「ヤハリ福ノ大学ヲ卒業スベシ」、予科に入るか正科に進むか、それはそれ「福ノ大学」が一番との結論に達したもらしい。

2月に入ると学校の授業も本格化して、能海にとっても英語による授業が魅力的だったようだ。よく理解できないところもあったらしいが、教師の大半が外国入たちだった。

こんな折、面白いことがあったらしい。2月5日の夕刻6時から、三田美似教会（ママ）で女性も加えて娯楽論の演舌会があるという噂が立ち、興奮した学生たちが大挙して押しかけ、能海も弥次馬になってこれに参加したらしい。ただ肝心の教会の扉は固く閉じられてしまい、中に入れなかったものの学生たちの罵声やら叫び声で、相当な騒動だったようだ。学生たちが賛成だったか反対だったか、記載がない。しかし、明治20年代

の初め、すでに女性解放の先駆者たちが慶應周辺で議論していたとは、この日記で初めて知った。福沢諭吉は明治七年当時から、日本で最も早く演説会というものを普及し始めていた。

運命を変えた人との出会い

能海が一種衝動的に東京に出て来て、関西で得られなかった大きな感動と強い印象を受けたのは、一つは自然景観といま一つは人との出会いはあったらう。このうち自然とは実は富士山であった。彼は名だけは聞いていたものの実物の雷士山を見たことがなかった。これが明治22年の年末、東海道線の車窓から初めてこの霊峰を仰ぎ見て、大変な感激を受けたものらしい。東京に出てからこの山は到る所から姿をのぞかせたので、ますます感銘は大きかったようだ。三田の慶應義塾の校舎の背後から望んだ印象は、日記にも書き遣しているし、英文日記の方には富士のカットが自筆で描かれている。

慶應での在学はわずか一年足らずの短い期間だったが、人との出会いは大きかったにちがいない。とくに慶應創設者の福沢翁もその一人だったはずだが、当時彼はすでに雲の上の人だったので、気軽に話せる相手ではない。しかし外国人との関わりの方がむしろ楽しかったらしい。そのうちの一人に、サー・エドウィン・アーノルドがいる。

2月19日の日記に、「(午後)三(時)、サー・エドウィン・アーノルド、令女共二福沢先生等数名来塾」とある。この折、アーノルドは化学の話をもっとしたらしいが、この間、一緒に来た令嬢はおとなしく椅子に坐って話を聞いていたという。アーノルドはインドにいた間、梵語学校の校長を勤め、その後、英国に帰ってデイリー・テレグラフ紙の主筆となり、能海が東京に出て来る年の11月に、特派員として来日したのだという。彼は仏教に深い関心を抱き、釈迦の生涯をとくに無韻詩に詠んだ『アジアの曙光』(The Light of Asia, 1879)の著者として著名だった。能海たちが翻訳を試みたという『亜細亜の宝珠』というのは、この詩集だったらう。

能海の英文日記には、彼と令嬢の印象が細かくふれられている。能海はこの学校での出会いのあと、アーノルドの自宅をも訪問し、アーノルドとは日本の仏教について、令嬢とは季節の花につい

て語り合ったという。とくに能海の仏教についての間に対し、アーノルドの見解は日本の仏教はシナ、朝鮮を経由して人って来たので、インド起源のものとは違っていると指摘したらしい。本来は同じはずのものが違うとなると、僧侶としての能海には少なからぬショックだったようである。この部分の能海の「英文日記」にいくらか混乱があって、よく意味がとれないが、令嬢は大変美しい容姿をしていたと言っている。(Sir Edwin Arnold …… came to Japan which is daughter who is look 2 time eight years old and very beautiful ……)。令嬢が8歳というのではまだあどけない子供で、多分、この場合8×2のsixteenのことだったのであろう。

ウェストンとはだれだったのか

能海が慶應義塾で会った外国人教師の中で、とりわけ注目されるのが、2月24日にある「(今日ハ Weston ト云フ英人ニシテ種々話タリキ) 英国籍」という記事である。そして、さらに28日の項に、「(ウェストン新聞ヲモチ来リ、追々ニハ日本デモ英字新聞ハ盛ニナルコトナレバ読ミタルベシトテ、良文ナリトテ英国ノダービシア県ノ新聞ヲ持ち来リ、ヨマヤシヤフノコトヲ語々(ママ)ハナス(英文)」と、記している。このウェストンという人物像がいまひとつはっきりしないのである。のちの日本人にとって、とりわけ興味を引くのは、このウェストンという英国人がウォルター・ウェストンではないかという疑問である。

日本でウェストンといえば、『日本アルプスの登山と探検』(1896年、ロンドン刊)の著者ということになる。では慶應にいたウェストンと同一人物だったかとなると、途端に不明となってしまう。証明する手が無い。ウォルター・ウェストンは英国教会伝道協会(CMS)の宣教師として、明治21(1888)年来日し、熊本・神戸等で布教活動をしたあと、明治23年1月24日、神戸から横浜に出て来たこと、これは日本山岳会編の『ウェストン年譜』にある。そして、どうやらこの1月にCMSを辞めたらしい。するといつでも東京に出て来られた条件が揃っている。

私はウェストンがだれであっても一向にかまわないのであるが、昨年は日本山岳会創立百年に当たることだし、能海の(邦文)日記も覆刻されたこ

ともあって、いまましこの関係をはっきりさせた気持ちもある。ただ能海とウェストンの関係を初めて発掘したのは岡崎秀紀氏であるが、決定的な資料が、いまだに見つかっていない。慶應の方にも当時の記録がないとなると、あとは推測するしか手がない。

そこで、一番可能性のあるのは、ウェストンが授業中に持参の英字新聞を生徒に見せたという、その英文日記の一節にある Darvyshire Advertiser And Jounnal etc. で、この新聞名の Darvyshire である。能海はここを his town としているので、これを信ずればここがウェストンの生地ということになる。ただし Darvyshire は正しくは Darbyshire のはずである。ダービシャー県の中心都市がウェストンの生まれた Darby に当り、中村保氏が英国山岳会の友人に問い合わせて下さった限り、これは確認できた。すると慶應にいたウェストンと登山家のウェストンとは、同じ土地が生地ということになる。

資料の面から推定がむずかしいのなら、こんな方法はどうか。能海が慶應に在学中の8月、ウェストンは富士山に登り、この頃から積極的に登山に熱中していく。そして翌年8月になると、今度は能海が富士山に登る。これは偶然の一致だったろうか。能海はウェストンに、自分は将来、チベットに行きたいと言ったことはなかったろうか。もしそうなら、ウェストンはなんと言っただろうか。ただ開き流したか、あるいはこんなことは言わなかったろうか。「チベットは平均高度が4000メートルを越えている。君はこの高度に耐えられるだろうか。それには一度、富士山に登ってみてはどうか。富士山は3800メートルあるから、もし大丈夫なら高山病にはならないだろう」と。しかし、そう言ったウェストン自身がまだ富士山に登っていなかったのだから、自ら挑戦してみたのではなかったか。ただこれを証明する裏付け資料がない。

ウェストンは明治27(1894)年に帰国し、再来日したのは、35年のことだった。このとき能海は東チベットに向ったまま消息を絶っていた。このニュースをウェストンは知ったろうか。多分、聞いてはいなかったろう。

明確な証拠を欠くが、私は能海が慶應で学んだウェストンはほぼ登山家のウェストンと言って間

違いないと思う。相矛盾するものがあまりになさすぎる。二人は偶然に出会い、また互いに影響を与え合ってやがて別れていった。当時のウェストンは無名であった。その後、彼は日本で不滅の名を遺した。個性の強い二人を引き合わせたのは、同じ個性の強い福沢の学校だったということも、なにか意味があったのかもしれない。

消えた足跡

明治23年12月、能海は慶應義塾を退学し、翌年1月に哲学館に入学することになった。理由は学費の問題だったろう。26年7月に哲学館を修了して、故郷の島根に帰ると、本山（東本願寺）にチベット行の支援を要請し、ようやく旅行費用の援助が受けられることになった。

明治31（1898）年7月、神戸港から上海に渡り、次いで揚子江を遡江して三峡の難を抜け、翌32年1月に重慶に着いた。ここからチベット国境の町バタン（巴塘）にまで行ったものの、現地民の妨害で入蔵は果せず、結局、四川省成都に引き返すしかなかった。そこで明治33年、北方ルートに切り替え、西寧、青海よりラサ潜入を狙ったが、これも失敗し、重慶に戻るしかなかった。翌年、今度は雲南経由でチベットに向うが、4月に故郷に手紙を出したのを最後に、以後音信不明になってしまった。彼の運命になにが起ったのか、原因はいまだ不明である。それから茫洋1世紀がたってしまった。

（歴史家 かねこたみお）

【付記】

- 1) 『春秋日記』は、『能海寛著作集』第三巻（うしお書店、2005年）に収録されている。『英文日記』は同十三巻に収録予定。
- 2) 本資料は、社団法人福澤諭吉協会の承諾を得て同協会作成『福澤手帖131号』から転載した。（雲南懇話会 前田栄三記）